

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 矢島 壮平

矢島壮平氏の博士学位論文『アダム・スミスの道德哲学と人間本性の合目的性』は、アダム・スミスの倫理学を彼の中心の著作である『道德感情論』をめぐって論じたものである。本論文においては、同時代のヒューム、マンドヴィルの道德哲学の研究が参照されているのはもとより、ハーマン、エリオット、マイケル・スミス等の現代のアダム・スミス倫理学の研究成果も踏まえられている。本論文で矢島氏が目指したのは、スミスの道德哲学のうちに「目的論」という考え方を見出し、その持つ意義を明らかにしようとする事である。アダム・スミスの『道德感情論』のみならず『国富論』においても、「見えざる手」という概念はキーワードとなるものであり、そこに遠くアリストテレスに遡れる、目的・手段の形で対象を把握する目的論的構造を見ることが可能である。にもかかわらず、ともすれば、アダム・スミス研究の現代における「主流」からは、「見えざる手」の目的論的解釈は嫌われがちであり、アダム・スミス倫理学の研究も、この目的論という言葉避けて、ニュートンの機械論、経験論の原則に従って論じようとする傾向が見られる。

しかし、矢島氏は、あえて目的論的発想をスミス倫理学の必要不可欠な要素と認める。そこで、同時代の哲学者ヒュームの宗教哲学における神学的目的論との連続性の研究、同じく同時代のマンドヴィルの功利主義的目的論との比較対照が行われる。また、その道德哲学上での目的論の導入によってこそ、アダム・スミス倫理学に現代における新しい学問的成果を取り込む可能性も開かれてくることが示される。さらに、そのことによって、道德の実在性の確証も可能になるということをも主張するのである。ここで、矢島氏が道德哲学における合目的性を指摘することは、人間本性とその道德性の、世界の中での適応可能性を示すことであり、それゆえにこそ、道德が実在性を確保し得るということを示すものに他ならないが、この論旨を、矢島氏は現代における、アダム・スミス研究の動向を精査しつつ丁寧に論じているのである。

その過程で特に注目していることは、アダム・スミス固有の「見えざる手」の概念を、「理性的存在者のデザイン」という概念に置き換え、さらにそれに自然選択のような進化論的発想を結びつけることによって、新しい学問論的可能性を持つ概念に変容させることを試みていることである。ここに、アダム・スミス倫理学の新たな展開の可能性が示されていると言えよう。

そうはいつても、確かに、矢島氏の論述の中には、まだ十分こなれていない概念も散見されないわけではない。道德の内在性、外在性といった言葉づかいとか、功利的デザイン論などという概念の使い方など特に分かり難い。しかし、それを差し引いても余りあるだけの新しさ、可能性を本論文は示していると言える。以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。